

氏名	包原 麻依子		
ヨミガナ	カネハラ マイコ		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博音第349号		
学位授与年月日	令和3年3月25日		
学位論文等題目	〈論文〉 シューベルトのピアノ・ソナタ D 958・D 959・D 960の連作性に基づく演奏解釈の一考察 〈演奏〉 シューベルト ピアノソナタ第21番 変ロ長調D960他		
論文等審査委員			
（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科） 青柳 晋
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科） 伊藤 恵
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科） 大角 欣矢

（論文内容の要旨）

本研究はフランツ・シューベルト(1797-1828)の最後の3つのピアノ・ソナタD958、D959、D960の連作性を考察し、それを基に演奏解釈の提案を行うものである。先行研究ではこれらのソナタの相互関連が指摘されており、例えばGodel(1985)、Brendel(1988)、Paetsch(1995)等が、作品間に共通する音楽的要素を抽出しその連作性を指摘する。それらの多くは作品間の共通項を示す事に重きが置かれている。しかし演奏の際には、作品の連作としての在り方をどう意味づけるかにまで考察を広げ、そこからどのような演奏表現を組み立てるかが重要と考えられる。この点Krause(1992)は1825/6年に書かれたソナタ(D 840, 845, 850, 894)と最後の3つのソナタを各々一つのグループとし、各曲順も偶然を越えたものとする。Krause(1997)では、前者の内完成された3つ(D845, 850, 894)と最後の3つを対応させ、両グループに共通の事として、ロマン主義に通ずる「死」「自然」「愛」が各曲に順に見出せる事が示唆され、作品を意味のある連作として考える事への一つの妥当性を与えてくれた。しかしこの記述は、作品理解の手がかりとして大まかなイメージを描くものではあっても、最後の3曲に特化した仮説を、根拠を挙げて検証したものではない。したがって本論では、最後の3つのソナタが3曲のまとまりである意味を以下の方法で詳しく考察する事により、演奏解釈の可能性を広げる事を試みた。

第1部では、3つのソナタが意味を持った連作として捉えられる事を探るための第一段階として、作品の構想段階である草稿に注目した(第1章)。これらの草稿が書かれた時期は推測に留まっている。そこで私はこれらの草稿の成立時期を明確にする事を目的とし、ソナタと同じ1828年に書かれた作品の内5～10月頃の自筆譜に着目し、bとkの筆跡に関する時期的な特徴の有無を検証した。その結果、Hilmar(1978)による草稿の成立時期の推測、即ちD958は1828年春の終わりに、D959、D960は夏頃に同時に構想されたという説が蓋然性の高いものであるという結論に至った。また、D959とD960の筆跡からは作品の時期的なつながりをくみ取る事ができた。作品に作曲家の伝記的、音楽的背景が結実しているとなれば、この事はまさにシューベルトがこれらのソナタの創作時にどのような生活状況にあり、どのような創作活動をしていたのかを知る事にもつながる。次に作品の連作性を探る第二段階として音楽の内容に注目した。まずは作曲に至るまでのシューベルトの内面でどのような事が起こっていたのか、即ち「発想の原点」を知る必要があると考えられる。したがって第2章では、各ソナタの原点ともいえる調性と、ソナタの礎である第1楽章第1主題の構成要素に注目し、そこにどのような意味が込められているのかを探った。ソナタとの類似がみられる作品との比較から、各ソナタを検証した結果、D960には同時期に書かれた声楽作品《信仰、希望、そして愛》(D954)との強い類似が見られ、他の類似作品を考慮してもその第1主題のB-durコラールには「救い」や「愛」、宗教性が含有される事が推察された。またA-durのD959には、シューベルトが歌曲においてA-durという明るい調性をネガティブな詩に用いている例からある種の

アンビバレント性が、D958には葬送や運命という観念が見出された。ここまでを概観すると、各ソナタは各々D958「信仰」、D959「希望」、D960「愛」というキーワードで解釈しようという展望が見えてきた。ただしこの言葉は宗教的意味に留まらない、シューベルト自身の伝記的背景との関わりをもって解釈される。重要なのは、こうして3つのソナタが一つのまとまりとして意味づけられるという事であるが、更に各ソナタを結びつけるものの一つがコラルである事から、作品を「祈り」で結ばれる連作として捉える事もできるようになった。

第2部(第1～2章)では、当時のシューベルトの思考や音楽表現を更に探るため、同時期に書かれた作品から《ミサ曲第6番》(D950)と《白鳥の歌》(D957)を取り上げた。そしてそこに見られる表現を検証し、ソナタとの類似表現を探った。純粋器楽曲と声楽を有する曲は別のものであるが、同じ作曲家の作品であり、ある時期にシューベルトがどのような事を考えていたかについてはある程度の統一性があると考えられる。したがって、単に時期の近さだけではない、その頃のシューベルトの音楽の根底にあるものを探るため、その歌詞に基づいて、伝記的要素と音楽表現との関連を考察した。その中で、例えばこれらの作品にみられた十字架音型やコラルの表現はソナタにも見られ、《白鳥の歌》についてのYouens(2007)の研究を参照すると、その表現はシューベルトの人生と切り離せないものと考えられる事ができる。このように本章で検証した表現の中にはソナタの連作性を強める要素も含まれている事から、本論において3つの作品をシューベルトの人生との関わりをもって解釈する事への一つの根拠を示す事ができた。

第3部では、以上を踏まえ演奏解釈を探った。作品の連作性を考慮しての演奏表現を導く事、また、本検証により明確になる個々の特質やストーリーを考察する他、シューベルトの歌曲や手紙、日記、草稿等の作品を取り巻く状況証拠と照らし合わせつつ多角的にアプローチを試みた。その結果3つの作品には、病やアイデンティティの分裂といったシューベルト自身の苦悩を反映したような「現実を象徴する表現」がみられる反面、それを乗り越えるための「祈り」や「愛」、「希望」にまつわる表現がみられ、シューベルトの「自分自身の中に幸福と平安を見つける」(シューベルトが1824年に書いた手紙の一節)という言葉が音楽に表れている様相も推し量る事ができた。このように3つのソナタを構成する要素が何を表現しようのかを探る事により、作品の連作性に関する研究と、演奏研究を結びつけ、作品が意味を持った連作として解釈できる事を示し、演奏表現の可能性を広げるための一つのプロセスを提唱できた。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、シューベルトの最後の3つのソナタの演奏解釈を、その連作性にもとづいて行うものである。これまでの研究で指摘されてきた作品間の音楽的な相互関連を踏まえつつ、本研究では作品が3つであることの意味を探ることへと考察を広げ、解釈の可能性を広げることを目的とする。研究の第一段階は、作品の連作性を改めて探ることである。まずは創作時期のつながりを草稿の再検証によって考察した。さらに、音楽内容からもそのつながりを見いだすため、音楽的類似がみられるシューベルトの他の作品を手掛かりに、ソナタの着想がどのような思考を経て生まれたものなのかを探求した。第二段階は、ソナタと同時期に書かれたミサ曲D950や白鳥の歌の検証を通し、当時の音楽表現とシューベルトの人生との関わりを考察し、ソナタ解釈への応用を試みた。以上の検証で考察した各表現が、シューベルトの伝記的な部分と切り離すことができないものであると同時に、ソナタにおいて連作性を強める要素となっていることを示した上で、シューベルトの手紙や散文、日記、そして先行研究における様々な論考を参照しながら、作品が意味のある連作として解釈できることを論じ、演奏解釈を行った。学位審査では、ソナタが作曲された年と同じ1828年に曲集として出版された「楽興の時」から2番、6番、そしてソナタ第21番を演奏した。これまで2回の博士リサイタルではソナタ19番、20番を演奏し、今回は研究の成果を盛り込むことを目標として最後のソナタに取り組んだ。また、前半で演奏した「楽興の時」はソナタとはジャンルの異なる作品であるが、本研究の目標の一つは、シューベルトの人生とピアノでの音楽表現の関わりを探るところにある。シューベルトのリートや声楽作品からピアノ演奏への応用可能性を探る過程で、本学生なりに得た手掛かりや知見を演奏へと反映させることを目標とした選曲である。論文において高く評価すべき

点は、それまで詳細な研究を行われてこなかった歌曲と器楽曲（最後の3つのピアノソナタ）の関連性を確かな論拠に基づいて見いだしたことであり、またこれまで見落とされていた「信仰、希望と愛」とソナタD 960の主題の関連性を発見したことなどは快挙であると言えよう。文章中重複する部分を割愛する必要性など、細かな改善点もあるものの、本論は今まで光のあてられなかった「詩」と「音」の共通性をシステマティックに適合・分類した労作であり、その着眼点と丁寧な調査は称賛に値する。演奏審査では「楽興の時」から2曲と、最後のソナタが非常に高い集中力で演奏され、充実した研究の成果が存分に発揮された秀演であった。優れた論文と素晴らしい学位審査は学位授与に相応しいと判断し、全員一致での「秀」での合格とした。